

目的 住居の室内気候は、その地域の気候風土、住居の構造・設備および住まい方の影響を受け変動するが、室内気候や住まい方は未だ十分に把握されていない。¹⁾ 本報では、沖縄地区および関西地区の新築住居を対象に夏季の室内気候を測定すると共に、室内気候の評価、冷暖房器具の使用状況、住宅に対する意識などを調査したので報告する。

方法 夏季の高温気候の影響を把握するため、年平均気温の高い沖縄本島と宮古島の暑熱気候を考慮した戸建住宅（通風住宅3戸、コンクリート住宅1戸）と関西地区（新築3戸）の住宅を対象に、外気温と室内気候を測定した。測定は住居室内（居間、寝室）の床上高さ1mの室温・黒球温度・湿球温度および外気温を携帯用温度記憶装置（4ch）を用いて20分間隔で測定した。また、温熱環境に対する意識調査として奈良地区の新築住宅を対象に住宅に対する温熱環境の配慮や住まい方などのアンケート調査を実施した。

結果 宮古島のK宅では、外気温は日中35℃まで上昇し、朝方には28℃に低下する。日射の影響が少ない北側の寝室気温は外気温と伴に変動するが、日中の室温は33℃とやや低い。外気温および室温（平均値）は、沖縄では外気温28℃～34℃（日較差6℃）に対し、室温は30℃～33℃（3℃）の変動である。また、窓は開放され、約0.5m/sの通風があり、「やや涼しい」と評価される。関西地区のF宅では日中の室温上昇が少なく高断熱住宅とみられるが、寝室では午後から日射が入り、夜間の冷房が不可欠である。関西では外気温ほぼ24℃～32℃（8℃）、室温26℃～31℃といずれも沖縄に比べ約3℃低い。

文献 1) 井関他：住宅温熱環境の実態調査，日本家政学会誌，Vol.39, No8, 1988. 8 他